新世紀
キャリア形成

地方の若年者雇用対策
～ジョブカフェでの試み～

若年者をとりまく就業環境

現在、国内の雇用情勢は改善傾向が続いていると言われるが、若年層においては依然として厳しい状況が続いている。総務省が今年7月に発表した6月の労働力調査では、全体の完全失業率が4.6%であるのに対し、15～24歳の完全失業率は9.2%となっている（資料1参照）。また、フリーターや派遣といった不安定な雇用環境で働く若者も多い。それに加えて、NEET※と呼ばれる労働意欲のない若者も増加しており、これらの問題についても大きな政策課題となりつつある。

地方自治体の雇用対策

このような状況の中、各地方自治体ではどのような取り組みが行われているのか。現在、地方では、都市部とは異なった地方独自の雇用問題が浮かび上がってきている。

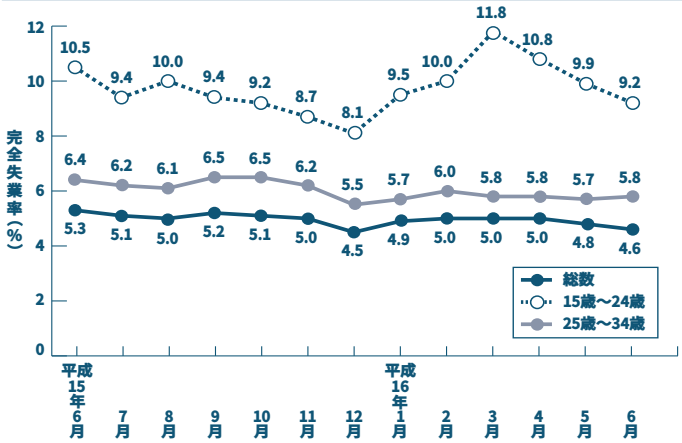
今回取材した群馬県でも、若者の就業構造が大きく変化している。特徴的なのは、正規従業員が大幅に減少し、パート・アルバイトが急増している点である。これは群馬県には製造業が多く、そこで多くのパートタイマーが必要とされていることなどが主な原因であると考えられる。若年層においては、都市部と比較した場合に、企業や職種の数が圧倒的に少なく選択肢が限られていることや、若者が地域の企業に魅力を感じていないことによるミスマッチが問題となっており、地域の実状に合った人材育成が急務となっている。

政府の取り組み

このような状況を改善するため、現在、文部科学省、厚生労働省、経済産業省および内閣府が連携し、若年者の雇用問題対策に政府全体で取り組んでいる。2003年4月には「若者自立・挑戦戦略会議」が発足し、同年6月に若者の能力向上とその就業促進のための政策として「若者自立・挑戦プラン」がまとめられた。このプランの中核的施策となる新たな取り組みが「若年者のためのワンストップサービスセンター（通称ジョブカフェ）」事業である（資料2参照）。ジョブカフェとは若年者が雇用関連サービスを一カ所でまとめて受けられる施設で、各都道府県が地域の実状に合わせて設置しており、各省は連携してこれを支援する。経済産業省は、このうち15のモデル地域を選定し、民間を積極的に活用してカウンセリングから研修までの一貫したサービスを提供する事業を委託している。今回は、ジョブカフェのモデル地域に選定された15地域のうち、特色ある政策を打ち出し、NPO運営で「若年者による若年者のためのジョブカフェ」を展開する群馬県若者就職支援センターの取り組みについて取材した。

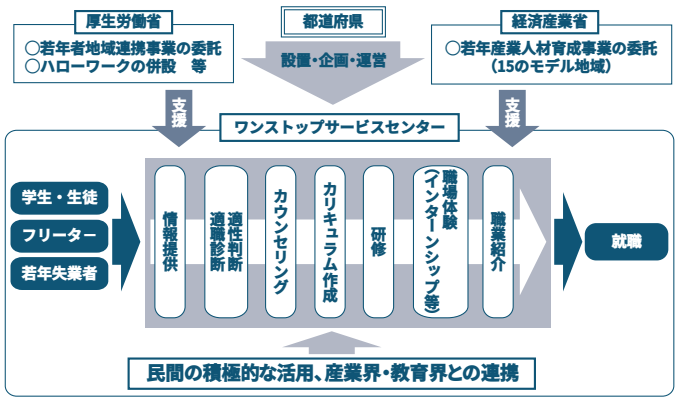
※ NEET（Not in Education, Employment or Training）：**就業も在学もしておらず、働こうとしている失業者でもない若者。先進国では若者の失業問題と並び大きな政策課題になっており、日本でもその対策が迫られている。**

資料1 若年者の完全失業率の推移



参考：総務省統計局ホームページ「労働力調査」
（http://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/tsuki/index.）

資料2 ジョブカフェ事業の概要



出所：経済産業省ホームページ
「『若年者のためのワンストップサービスセンター（通称ジョブカフェ）』事業モデル地域の選定について」
（http://www.meti.go.jp/kohosys/press/0005153/0/040420job.pdf）

群馬県若者就職支援センターの取り組み

財団法人群馬県勤労福祉センター
群馬県若者就職支援センター事務局係長
吉田勝彦 氏

1986年群馬県入庁。群馬県商工労働部労働政策課で若年者に対する情報発信事業などに携わる。2004年4月から、派遣職員として財団法人群馬県勤労福祉センターに勤務、現在に至る。

―― 若者の就職を支援するお立場から、現在の群馬県の就職事情をどのようにご覧になっていますか。

吉田 群馬県は、有効求人倍率の数字だけを見れば1倍を超えていて、全国的に見てもかなりよい状況であると言えます。ただ、若者について見るといくつか気になる特徴があります。まず、失業率は10%弱程度と全国とほぼ同じ水準なのですが、就職を希望しながら、あきらめて求職活動をしない若者の割合が約7%と、関東地域の中で比較してもかなり高い。特に高校生は、就職活動を途中であきらめる割合が高い傾向があります。失業率や内定率では、結局は現に職を探している人が分母になるため、このようにあきらめて求職活動をしない場合には表面化せず、数値にも反映されてこないのです。その他にも、若者のパート・アルバイトの増加率が関東地域で最も高く、また、パート・アルバイトに不安を持っている若者が多いこと、そして就職して1年以内に転職する若者の割合が高いといった特徴が挙げられます。有効求人倍率の高さは、パートタイマーに対する求人倍率の高さで底上げされているのが現状です。

―― なぜ群馬県では求職をあきらめる若者が多いのでしょうか。

吉田 群馬県の場合、製造業に携わる技能工等の求人の割合が高く、一方、事務系の職種は、パートタイマー等非正規の社員に置き換えられてきています。このような就業構造上の特徴から、若者の意識とのミスマッチ現象が見られます。もう一つは、厳しい雇用情勢の中にあって、そもそも自分は何をしたいのか分からないという若者が少なからずいると思います。3年前に実施した県内フリーター調査によると、フリーターになった理由として、「自分に向いている仕事が分からない」と「自分探しをしたかった」を合わせた割合が約3割を占めていました。

―― そうした現状に対し、どのような対策を講じていったのでしょうか。

吉田 2000年度に、群馬県として初めての労働基本計画である「ワークプラン21」を策定し、若年者雇用対策を重点施策に位置づけました。翌年度には、「新しい元気な働き方の情報発信研究会」を設置し、研究会の提言に基づき、「若者による若者のための情報発信事業」をスタートさせました。これは、さまざまな分野で自分らしく働いている人を若者が取材し、働く喜びを肌で感じる機会が少ない同世代の若者に向けて、ホームページ「CANWORK(キャンワーク)」で紹介していくというものです※1。ワークプラン21のキーワードは「自立と協働」でしたので、若者ボランティアと県の協働によるキャンワーク事業は、まさにその具現化でした。

1年目は公募スタッフもなかなか集まらず、学生とフリーター12名による出発となりました。2年目には、スタッフは50名。ホームページだけでなくシンポジウムの開催なども開始し、3年目には100名を超えるスタッフが集まりました。その頃から、若者と仕事が出会うベースキャンプとしてのワンストップセンターの必要性が見えてきたのです。ちょうどそのタイミングで、経済産業省、厚生労働省などによる「若年者のためのワンストップサービスセンター(通称ジョブカフェ)」事業が始まりましたので、群馬県では「若者による若者のための就職支援サービスセンター」として申請し、全国15地域のモデル事業の一つとして選ばれたわけです。

―― 群馬県のジョブカフェ事業の最大の特色は、若者によるNPO法人が運営しているところにあります。具体的にはNPOはどのように関わっているのですか。

吉田 群馬県では、高崎市、桐生市、沼田市に3つの若者就職支援センター※2を置き、それぞれが異なるNPO法人により運営されています。その中心となる高崎市のセンターは、NPO法人DNA(Design Net-works Association)(39頁・註参照)に運営を委託しています。このNPOは、キャンワーク事業に携わった学生を中心に設立されたNPOで、県内の大学・短大・専修学校の学生などが会員登録しています。具体的な役割としては、まず、来所者に対する受付・案

内を行い、キャリアカウンセラーとの橋渡しを行っています。また、センターの広報やセミナーなどのイベントの企画・実施に携わっています。センターオープン前のプレイベントでは、NPOの若者が、センター周辺の商店街を清掃しながら挨拶に回り、広報チラシなどを配り、PRを行いました。

―― オープンしたばかりではありますが、今後のイメージを教えてください。

吉田 就職に対する不安や悩み、分からないことがあったときなど、ここに来れば情報を入手したり、カウンセラーに相談することができます。ミニセミナーや企業見学会も随時開催していますので、いろいろな職種で働いている人の話を実際に聞いて、仕事のやりがい、厳しさも体感できます。気軽にたまり場として活用しながら自分らしい生き方のヒントを見つけてもらえればと思います。

新世紀 キャリア形成

―― 求人情報を探すだけでなく、ここへ来れば職業観も身に付けられるわけですね。

吉田 このセンターは、職業意識の醸成から相談、情報提供、職業紹介までを一貫して支援することを目的としています。求人開拓も進めていますので、求人情報もかなり蓄積されてきていますが、求人情報の提供や紹介だけでなく、働くことについてトータルに支援していきたいと思います。

―― 学生のNPOが運営するメリットはどのようなことなのでしょうか。

吉田 若者がどんなことに不安を持ち、どんなアドバイスを必要としているのか。若者がセンターに求めるものは何か。それを把握する必要があります。ここでは、最初の受付けをする側も就職を間近に控えた学生です。同じ悩みや情報を、同じ立場で共有でき、センターのサービスにつなげることができるという点が大きいのではないでしょうか。セミナーの企画や若者が訪れやすいセンターの雰囲気づくりなどに、力を発揮してもらっています。

―― 今後どのように活用されるのか注目していきたいと思います。どうもありがとうございました。

※1 CANWORK ホームページ
http://www.wakamono.jp/canwork/canwork/index.html

※2 群馬県若者就職支援センター ホームページ
http://www.wakamono.jp

若者による若者のためのキャリア形成支援

特定非営利法人 Design Net-works Association
代表理事
渡邉大輔 氏

1982年群馬県生まれ。2001年高崎経済大学地域政策学部地域政策学科入学。同大学4年在学中。2003年“若者能力発揮コーディネート事業”実行委員長。2004年“若者社会活動支援NPO団体設立準備会 Design Net-works Association〈DNA〉”代表を経て現在に至る。

―― 現在、高崎経済大学4年生の渡邉さんが、なぜNPOの代表理事として若者の就職支援活動に取り組んでいるのか教えてください。

渡邉 高校を卒業してからやりたいことがあって東京に出たのですが、業界の厳しさを目の当たりにして地元に戻り、大学に入りました。大学1,2年のときは、やりたいことにいろいろと手を出したのですが、すべて中途半端だったため、大学4年間のうちに、何かに夢中になって打ち込み、かたちに残せることをやりたいと思っていました。

そんな折に大宮研究室に入ったことが活動を始める直接的なきっかけとなりました。大宮研究室では、社会学をベースにした能力開発や自己啓発をテーマとしています。まちづくりについても積極的で、大宮登先生ご自身が、フィールドワークを中心としたスタンスで研究を進める方なので、実際に社会に出ていってワークショップなどを行う機会が多いのです。

2001年から県の労働政策課が実施した「新しい元気な働き方の情報発信」に高崎経済大学も関わっており、毎年、キャンワー

クとシンポジウムの内容を話し合い、その年の6月頃から学生による実行委員会を開催して進めていたわけです。私自身は2003年度から参加し、実行委員長に立候補しました。それがきっかけで特定非営利活動法人Design Net-works Association〈DNA〉※を設立し、今に至るというのが経緯です。

―― DNAのミッションの1つに、「若者のキャリアデザイン力の養成」という言葉が挙げられていますが、この必要性を感じますか。

渡邉 今の若い人は、学校生活を中心とした同世代の人との付き合いがほとんどで、実社会との接点があまりにも少ない。親からも聞かされますが、昔は家庭の中でも、地域社会の中でもそれぞれ役割があって、いろいろなことを手伝わされたりした。しかし今の学生は、そのような役割を担うことなく、社会から距離を置いて生きている。モデルとなる大人との接点が少ないため、働くことのイメージもしにくくなり、自分のキャリアプランを描きにくくなっているのではないでしょうか。自分の将来像を描くためには、遊びやアルバイトだけでは不十分なのです。ミッションに掲げているのは、そのような問題認識からです。

―― キャンワークは、実社会で「カッコよく」働く人を取材して、ホームページで紹介することが事業内容ですが、やはり「カッコいい」社会人に学生は興味あるものですか。

渡邉 大学を出るまでの22年間、ほとんどの学生は働く現場、実際の仕事を見ることなく過ごしてきます。そこでいきなり就職だ、仕事だと言われてもなかなか難しい。学校社会と実社会のギャップが大きいことは私自身も実感しています。そのため、社会に出る際には、何らかのかたちで働くことに接しておきたいという気持ちが学生にはあるのではないでしょうか。

ただ、学生にも温度差はあって、DNAに参加している学生でも、最初は自分の意思ではなく、先生に連れてこられるかたちで来ている人もいます。それでも一緒に活動し、働く人と出会う中で、「今まで気付かなかったことが見えてきた」という感想を持つ人がほとんどで、それが働くことを真剣に考える大きなきっかけになっていることは確かです。

―― 学生から見て「カッコよく」働いている人とは、どのような人なのでしょうか。

渡邉 いわゆるマスコミ等によく出てくるような人をイメージしやすいことは間違いありません。ただ、キャンワークでゲストを人選するときには、職種と名前だけで決めるのではなく、他の付随情報をもとに選ばせていただくことが多いです。例えば、地元のお祭りを盛り上げる美しい花火をつくってくださっている花火職人の方、というように、ストーリーがあることで、カッコいいと思えるわけです。何の情報もストーリーもないと、単にマスコミで目立っている人になってしまいがちです。これまで99人の方を取材しており、次回で100人目。魅力的な方がたくさんいらっしゃるので、どなたを取材しに行こうかと悩んでいます。

―― DNAは今年7月から群馬県若者就職支援センターの運営もされています。具体的にはどのような活動をしていくのでしょうか。

渡邉 若者と社会の交流の場として、たまり場的機能を果たせるようなネットワーク拠点にしたいと思っています。例えば、先ほどのキャンワークをホームページで発信していくだけではなく、実際にこのセンターを使って行う。つまり、カッコよく働く人をお招きして、ここで学生たちとふれあう場を設けるのです。それから毎週水曜日には、センターでコミュニケーションセミナーというイベントを開催しているのですが、その企画にも関わっています。現在はまだ受付・アテンダント業務が中心ですが、今後は隔週土曜日に、社労士や税理士の方を講師として、資格取得のためのセミナー等を行いたいと考えています。

―― オープンしてまだ日が浅いのですが、どのような人がセンターを訪れていますか。

渡邉 学生よりも、むしろ25歳前後の失業者やフリーターの方が多いようです。

―― センターを訪ねてくる人にとって、DNAが運営しているメリットは何だと思いますか。

渡邉 私を含めてスタッフ自身も、自分のキャリア形成や働くことへのイメージがはっきりとできているわけではありません。そんな人が就職支援センターを運営していいのかという疑問もあると思いますが、そこは逆の発想をしています。つまり、来所者も悩んでいる、私たちも模索している、そういう同じベースで一緒になって考えていけることがメリットだと考えています。年齢的にも近いので、自分のことのように真剣にサービスできる点も長所だと思います。

―― 今後このセンターをどのような場所にしたいと思いますか。

渡邉 ここに来ればいつも何かやっている、何か学ぶものがある、得るものがある、そのような場所にするのが夢です。そういう意味ではどのような方にでも来ていただきたいのですが、特にNEET（36頁・註参照）やフリーターといった、なかなか働くことに意欲を持てない人に来ていただき、一緒に働くことについて考えていければと思います。このセンターを、学びの場であり、育ちの場であり、巣立ちの場となるようにしていきたいです。

群馬県若者就職支援センター

※ 特定非営利法人 Design Net-works Association 2004年6月認証。7月設立。若者社会活動支援NPO法人。略称DNA。ミッションに“若者の社会活動の場を確保し、社会の中で自分らしく輝いて生きていく力（社会力）を養う”“若者のネットワークを広げ、生き方や働き方をデザインする力（キャリア・デザイン力）を養う”を掲げる。事業概要は、CANWORK事業（働いている方を取材し、働くことや若者へのメッセージをweb上で情報発信）、EVENT事業（働くことを考えるシンポジウム等のイベントを学生主体で企画・実施・運営）、drop-in事業（群馬県若者就職支援センター運営支援）、まちづくり事業（若者の視点を活かした、まちづくり施策等への提言）、radi-com事業（コミュニティ・メディアを軸としたまちづくり支援。学生自主企画による番組制作）の5つを中心に、若者の社会活動支援を行っている。今後は、インターンシップ等にも力を入れていく予定。
DNA ホームページ
http://www.design-net-works.net（準備中）